

軍事化と脱軍事化の相克

——京都府京丹後市丹後町宇川における米軍基地建設問題を事例に——

滋賀県立大学 大野光明

1. 目的

2014年5月、京都府京丹後市丹後町宇川にて新たな米軍基地建設のための工事が着工した。計画の発端は、2013年2月の日米首脳会談で、米軍Xバンドレーダーの日本への追加配備が合意されたことであった。朝鮮民主主義人民共和国などを念頭においたミサイル防衛システムの強化のための合意である。このレーダーは在日米軍再編計画に基づき、2006年に青森県の航空自衛隊車力分屯基地に配備され、その2カ所目の配備先となったのが宇川であった。日米合意後、2013年9月には京都府知事と京丹後市長による協力表明、予定地の地権者からの土地借り上げ契約の締結を経て、工事着工に至った。2014年9月からは米軍駐留が開始、2015年5月からは隣接する自衛隊経ヶ岬分屯基地の拡張工事も始まり、日米の軍事基地が新設・拡張されている。

そこで本報告では、京都府京丹後市宇川地区における新たな米軍基地建設と既存の自衛隊基地の拡張によって、地域社会の軍事化がどのように進んでいるのか、また、それに対して反基地運動による脱軍事化の実践とはどのようなものかを明らかにする。

2. 方法

2013年8月から現在まで断続的に行ってきた宇川現地でのフィールドワーク、地元住民への聞き取り調査、宇川内外の反基地運動への参与観察の結果を考察した。また、防衛省、京丹後市、運動団体の発行者、新聞記事などの文書資料についても調査し、分析の対象とした。なお、本報告における軍事化とは「何かが徐々に、制度としての軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」である（エンロー 2006: 218）。

3. 結果

地域社会における軍事化の力学とそれに抗う脱軍事化の実践との相克のありようが明らかとなった。

第一に、軍事化の力学は、(1) 当事者の切り縮め、(2) 国家安全保障の最優先化と住民の「守られる客体」化、(3) 地域振興や地域行事などの文化的領域への軍人・軍属の参加、(4) 地域内外の重層的な分断の兆候の顕在化、などとして確認することができた。

第二に、宇川の住民による米軍基地反対運動や京都市内を拠点とする反対運動は、軍事化の進行する場を感受しつつ、(1) 基地建設と軍隊駐留にともなう被害の実態の記録と発信、(2) 重層的な分断の兆候に対する、共に考える場・受け皿の創造、(3) 農業やもちつき、音楽などの文化的実践を通じた抵抗と自律的關係性の模索、(4) 東アジア、特に、韓国と沖縄の反基地運動とのネットワーク形成、などの特徴を確認することができた。

4. 結論

宇川における米軍基地建設と自衛隊基地の拡張は、地域社会にこれまで以上の軍事化の作用を広く深く及ぼしつつある。そのありようは、非軍事的な領域への介入を通じて、軍隊の暴力性を見えにくくさせるものであった。その一方、反基地運動は基地・軍隊のもたらす暴力を記録し訴えながら、脱軍事化の営みをネットワーク化させていた。

文献

エンロー, シンシア, 2006, 『策略：女性を軍事化する国際政治』 岩波書店.

大野光明, 2015, 「軍事基地がつくられるということ：京都での米軍基地建設と地域社会の軍事化」 日本平和学会編『平和研究』 45: 107-127.